

## 北方遊牧民族と雷

今 井 秀 周

### はじめに

中国の北方には、史上数多くの遊牧民族が活動したが、その活動記録の中に、彼らが雷に遭ったときの行動を記したところがある。そのときの行動に筆者は、なかなか興味深いものを見つけた。それは彼らの中に雷を非常に恐れた民族がいたこと、また逆に雷に反抗した民族がいたことである。

この行動に懐いた興味は二つある。一つは、同じ遊牧生活を送りながら、なぜ違った行動が生まれたのかという疑問である。もう一つは、彼らは雷を天神の一人あるいは天神のなせる業と見ていたから、この行動が違った原因が分かれば、彼らの雷信仰や天信仰の分析を進めることができるという期待である。しかし後者の分析を進めるには、前者の疑問を解いておかなければならない。そこで拙稿では、まずは彼らの行動の事実をまとめ、彼らの行動に違いが生じた原因を明らかにすることにする。

ただこの原因については、筆者は、おそらく主として彼らの生活地の自然条件によるものとの考えを持っている。なぜなら北アジアには幾つもの異なる自然環境があり、遊牧民らはそれぞれその自然に即した生活を送っていたからである。このためこの原因の究明は、彼らの行動と生活地の自然条件の関係を確かめるという方法で進める。

### 1. 雷に恐れ慄いた遊牧民族

はじめに雷を非常に恐れた民族の記録をまとめる。雷を非常に恐れた記録は、13世紀、モンゴル帝国のモンゴル人に集中している。

まずは、モンゴル人が雷に遭ったときの様子を記したものを3つあげる。

モンゴル帝国時代、宋朝からオゴデイのもとに使いした徐霆は、モンゴル人が雷の鳴るたびに、雷から逃げ隠れようとするかのようにかがみこむ姿を目撃した。

霆 韃人を見るに、雷霆を聞くたびに、必ず耳を掩い身を屈して地に至る。軀避の状のごとし。(『黒韃事略』)(1)

フランシスコ会修士ルブルクは、カラコルムにいた

メンゲ＝ハーンを訪ねたときの旅行記に、雷が鳴ったときのモンゴル人の様子をこう記した。

タルタル人は雷鳴を滅法こわがります。雷が鳴ると、他人をみな住居から出してしまい、黒いフェルトにくるまって、鳴りやむまでその中にかくれています。(2)

イル・ハーン国のラシード・アッディーンも、その著『集史』に、ルブルクと同じことを書いている。

(ウリヤングト以外の)モンゴル系の諸族は雷鳴がとどろくと、かれらは恐怖にとりつかれて、幕舎の中に閉じこもる。(3)

このようにモンゴルが雷に怯える様子は、中国でも西欧、西アジアでも記録された。モンゴル人の恐れ方は、尋常ではなかったのである。

モンゴルが雷を恐れた理由は、いくつもの記録に明記されている。それは雷を天神の怒りと信じたからであった。たとえばチンギス・ハーンの時のことを記した趙珙の『蒙韃備録』にはこう記されている。

その俗、最も天地を敬う。事あるごとに必ず天を称す。雷声を聞けば則ち恐懼し、敢えて師を行らず。曰く「天叫べり」と。(4)

モンゴル人は、天の神を深く崇敬していた。彼らは、もし天神の意志に背くようなことをすれば、天神は怒って自分たちに雷を下すと考えていた。そのため彼らは雷鳴を聞くと恐れをなし、戦闘まで中断したという。

モンゴル人は天神を怒らせないように、日常いろいろなことに気を遣った。とくに注意したのは、日中川で洗濯をしないこと、洗濯したものを戸外で干さないことだった。彼らは、こうした行為は天の怒りを招くと信じていたのである。このことは、ルブルクの旅行記に、

(モンゴル人は)衣類は絶対に洗濯しませんが、これは、洗濯が神を怒らせ、戸外に吊るして乾かすと雷が

鳴るといわれているからです。いや、衣類を洗っているものがあるとなぐりつけ、取りあげてしまうようなことさえいたします。(5)

とあり、またラシード・アッディーンの『集史』に、

かれらはしめった長靴を太陽に曝すときは雷鳴を招くと信じ、したがって、かれらは注意深く〔幕舎の〕天窓を閉じたのち、これを幕舎の中で乾かす。雷鳴はかれらの地方にひんぱんに発生するが、かれらは恐怖心を抱き、あらゆる種類の原因をそのせいであると考えている。(6)

とある。このほかフフ・ノールにいたグユクのもとに旅したフランシスコ会修道士のカルピニも、同様のことを記録している。(7)

川で洗濯すると天神が怒るという理屈は、おそらく一川で洗濯をすると川が汚れる。川を汚すのはすなわち地神に対する冒瀆である。その地神の不満が天神に知れると天神を怒らせてしまう—ということであろう。この観念がいつごろ始まったかは分からないが、チンギス・ハーンは水を汚し衣服を洗濯してはならないという掟を定めたから(8)、この掟が川を汚すことと天の怒りとを関連させる観念を助長させたことは確かである。チンギス・ハーンの命令は絶対だった。この命令を受けたモンゴル人は、川を汚さないために、食器類も水で洗わなかった。残った肉汁は鍋に戻し、手についた脂は自分の服や草などにこすりつけて拭いた。(9)

とはいえ、どれだけ注意したところで、雷は落ちてくる。そうしたときモンゴル人はどのように対処したのか。『黒韃事略』にはこうある。

雷と火に遭いし者は、ことごとくその資畜を棄てて逃れ、必ず年を期してのち返る。(10)

モンゴル人は自分が所有する家畜などが雷に撃たれると、それらを放棄し、落雷の場所から1年のあいだ遠ざかった。落雷の場所から遠ざかったのは、雷撃を天神から下された罰と考え、落雷の場所や落雷で死んだ家畜を不浄、不吉として恐れたからである。雷撃を受けた者がすべての財産をシャマンに清祓してもらったという事実から、これが明らかである。フランシスコ会の修道士カルピニは、清祓の様子を次のように記している。

火を二箇所に燃やし、それらのちかくに槍を一本ずつ立てて、この二本の槍の先端になわを一本はりわた

し、これに、バックラム布の小片を結びつけます。このなわとそれについた布片との下、二つの火のあいだを、人間・動物・住居を通らせ、女が一人ずつ両側にいて、水をふりかけ呪文を唱えます。そのとき車がこわれたり、何かがその場で地面に落ちたりすると、その呪術師たちがそれを自分のものにします。(11)

もし人が落雷で死んだ場合は、死者はもちろんその死者と親しい人々も清祓を受けなければならなかった。カルピニはその様子を、次のように記している。

落雷で死んだものがあると、その同じ住居群に住むものは、一人のこらず、上のようにして、火と火のあいだを通らねばなりません。そして、その死人の天幕・寝台・車・フェルト・衣服そのほか何によらず、死人の持ち物には誰も手を触れず、これらは誰からも不浄として忌避されます。(12)

しかしシャマンの清祓を受けたとしても、それでも雷に撃たれた人や、家畜、場所は恐ろしいものだった。モンゴルの帝室は、1年どころか3年の間、雷で死んだ者の一族がオルド（宮帳）に入ることを許さなかった(13)。また雷の被害を受けたところからは決して税を徴収しようとしなかった。こうした帝室の対応について、マルコ・ポーロは元朝皇帝フビライのときのことを、次のように語っている。

羊群その他の家畜群に落雷があった場合、その持主が何人であろうと、また被害頭数がいかに莫大であろうと、カーンはこれら家畜からは三年間その十分の一税を徴収しない。同様に商品を満載した船舶に落雷があった場合も、積荷税はもとより現物による抽分税すらも徴収免除とする。それというのもカーンは、だれの所有物に限らず、それに落雷するのを目して不吉の兆とみなし「この男は神の怒りに触れたなればこそ雷撃を被ったのだ」と解釈するから、神の怒りによって雷撃されたかかる貨物を徴収して国家の倉庫に収めたくないのである。(『東方見聞録』)(14)

モンゴル帝国から中国の元朝にかけて、モンゴル人が雷を極度に恐れたという事実は、このように多くの記録から知ることができる。

## 2. 雷に反抗した遊牧民族

雷に反抗した遊牧民については、四つの記録をあげる

ことができる。

最も古いのは『魏書』に記されたもので、5世紀から6世紀ごろの高車の記録である。高車はテュルク系の民族だったと考えられている。

喜びて震霆を致す。震あるごとに則ち叫呼して天を射る。(15)

高車の人々は喜々として雷を招き、雷に向かって矢を射かけた。『魏書』はこれが何を目的とした行動であったかを書いていないが、これはどう見ても、雷神に対する反抗、攻撃である。(16)

『魏書』にはつづいて落雷の後のことが書かれている。

而してこれを棄てて移去す。来歳の秋、馬肥ゆるときに至りて、またあい率いて震所をうかがう。殺羊を埋め、燃火抜刀して、女巫 祀説す。中国の祓除のごとくに似たり。而して羣隊 馳せて旋繞し、百帀してすなわち止む。人ひと一束の柳楸を持ち、回りてこれを豎て、乳酪を以てこれに灌ぐ。(17)

高車の人々は落雷があるとその場所を離れた。そして翌年の秋に戻ると、そこで儀式を行った。北アジアで雷が発生するのは主に春から夏にかけてであるから、翌秋といえは1年後ということになる。1年のあいだ落雷の場所から離れたというのは、前章で見た13世紀のモンゴル人の行動とそっくりである。きっと高車も雷の落ちた場所を恐れて、そこから離れたのであろう。高車が雷の落ちた場所に戻って行った儀式は、そこを清祓するためのものであろう(18)。この儀式では、羊を犠牲にし、火を燃やし、人々が祭場を回ったり木枝を立てたりするなどの儀礼が行われたが、これは北方遊牧民のあいだに広く行われた祭天儀式の形式である(19)。

『魏書』には、高車の人が雷にうたれて死んだときのこと書かれている。

時に震死および疫癘するものあれば、すなわちこれが為に福を祈る。もし安全にして他なくば、すなわち為に報賽す。多く雑畜を殺し、骨を焼きて以て燎す。馬を走らせて遶旋し、多きものは数百帀す。男女 小大となくみな集會す。平吉の人は、すなわち歌舞して樂をなす。死喪の家は、すなわち悲吟哭泣す。(20)

こうした儀式の記録から見れば、高車の人々が天神を敬い祭っていたことが確かである。しかし彼らは、雷に

反抗し攻撃を加えた。ということは、彼らは前章でみたモンゴル人ほどには天神を恐れていなかったか、あるいは雷神の行為と天神の意志とを分けて考えていたということになるであろう。

次はラシード・アッディーンの『集史』に見える、13世紀モンゴル帝国時代のウリヤングトの記録である。モンゴル帝国はモンゴル人が中心となりさまざまな民族を集めた国であったが、ウリヤングトは、モンゴル人の一部をなす一族だった。ところが他のモンゴル人がみな雷を非常に恐れた中で、ウリヤングトだけは雷を恐れなかった。『集史』によれば、ウリヤングトは、自分たちは雷を止めることができると信じていたという。

モンゴル系のウリヤングト族が雷雨をとめようと欲するとき、かれらは天、稲妻、雷をののしる。(21)

ウリヤングトの行為は、高車ほど攻撃的ではない。しかし雷に反抗していることには変わりはない。またののしった対象の中に天が入っている。こうしたところから見ると、彼らは天をひたすら畏敬すべきものとは考えていなかったようである。

とはいえこのウリヤングトも、雷撃を受けたものを恐れた。『集史』にはそれが次のように書かれている。

ウリヤングト族は雷光に打たれて死んだ動物を食べることをさしひかえ、それに近づかないように気をつける。(22)

なお『集史』には、ウリヤングトを含むモンゴル人たちが信じていた雷の姿を記したところがある。

モンゴル人の信ずるところによると、雷鳴は竜に似た動物が空より下り、その尾で地面を打ち、次いで、身をかがめて火焰を吐くことから生ずるという。信仰心深いモンゴル人はこれをしばしば目撃したと断言している。(23)

竜といえはすぐに中国の竜が想起されるが、北方遊牧民もこのような竜の存在を信じていた。北方遊牧民の首長は、中国と同じように竜を支配者のシンボルとし、竜の模様で御物を飾った。上の話では、竜は空から下り火焰を吐く動物だとしているが、より一般的には、竜は川や水と関係し、川水と天の間を往き来する動物神だと考えられていた(24)。この竜の存在を考えれば、前章で述

べた川で洗濯すると天神が怒るというモンゴル人の思考は、よく理解できるであろう。

三つ目は 19 世紀初めのシャマニズム研究者ドルジ・バンザロフが自著に書いた、ウリャンハイ人の記録である。ウリャンハイはモンゴル帝国時代のウリヤングトの子孫である。ウリャンハイは歴史の中にたびたび現れ、居住地を替え、ウリヤンカ、ウリヤンカイ、ウリヤンハンなどと呼ばれた。(25)

ウリヤンハン族或ひはウリヤンハイ人一族のみは、龍に対し一種の特権をもってゐるが、その理由は不明である。即ちラシッド・エッディンの年代記に記され、また現在も然るが如く、雷は彼ら一族及びその家畜を害し得ぬと信じられてゐるのである。それゆゑ雷の起る時に当たって、彼等は往々これを沈黙せしめんとし、て叫ぶことさへある。(26)

この記録によれば、19 世紀初めのウリヤンハイは、13 世紀のウリヤングトの頃とかわらず、自分たちは雷を止められると信じていたという。ここには、雷神が龍と書かれている。これはモンゴル帝国時代のウリヤングトの考えと同じである。雷を黙らせるために叫ぶというのも、ウリヤングトが雷をののしったのと同じ行為であろう。

四つ目は 19 世紀末のシャマニズム研究者ウノ・ハルヴァが収集したトルグート人の記録である。トルグートは英雄メルキュットの伝説を持ち、自分たちは雷に撃たれないと信じていたという。メルキュット伝説とは、ハルヴァの書から要約して引けば、次のようものである。

遊牧民トルグートの言い伝えでは、悪魔がラクダの姿になって水中を行くと雷がおこるという。ラクダの歯軋りから雷鳴と稲妻が起り、やがてラクダの歯が割れて大地に落ちたのが落雷である。英雄メルキュットは、このラクダを五日五晩へとへとなるまで乗り回し、降参させた。そして次のような条件をのませてやっと勘弁してやった。それは、雷雨になっても、「おれはメルキュットだ!」と叫んだ時は、雷で打ち殺さないようにということだった。その時以来、メルキュットという名のトルグートの一族は、雷雨が始まると、いつでも鍋釜を打ち鳴して「おれはメルキュットだ!」と叫ぶことになっている。そうすれば雷に打たれて死ぬことはない、この一族は考えている。(27)

このトルグート人の、自分たちは雷に撃たれないという考えは、前掲のウリヤンハイと同じである。但しトルグートは、ウリヤンハイが雷を雷神、龍神としたのと違って、雷を悪魔だとしている。

以上の四つの記録を比べると、反抗の仕方に少し違いはあるものの、どの民族の行動もたいへんよく似ている。この相似は、これらの行動の端緒がほぼ同じであること、そしてこの行動がごく限られた人々の間にだけ受け継がれていたことを推測させる。

### 3. 雷に対して異なる行動が生まれた原因

第 1 章にあげたモンゴル人は、雷を非常に恐れた。第 2 章にあげた高車らは雷を恐れず雷に反抗した。彼らが雷に対してこのように違った行動をとった原因は、そこには文化的要因もあったかもしれないが、おそらく主因は彼らが生活した土地の自然条件であろう。そう考える理由は、はじめに述べたように、北アジアの遊牧地域には様々な自然環境があるからである。本章ではこの点について確かめる。

#### (1) 北方遊牧民の活動地域

初めに確かめるのは、雷を恐れた遊牧民の生活地と雷を恐れなかった遊牧民の生活地がどこであったかである。

まず雷を非常に恐れた民族、すなわち 13 世紀のモンゴル人が生活した場所であるが、これについては先学の研究が豊富にあり、すぐに示すことができる。その場所は、西はモンゴル高原中央部から東はアルゲン河の流域であった。モンゴル帝国のモンゴル人は多数の部族の集合体であったが、この帝国の中心を成したチンギス・ハーンとその子、孫たち一族が生活し、勢力を拡大したのはここであった。またチンギス一族に従って世界制覇に乗り出したモンゴル有力部族の多くも、ここを根拠地としていた(28)。図 1 の地図に、この場所を A と示す。

それでは雷を恐れなかった遊牧民が活動していたのは、どこか。

高車の活動地は、先行研究によれば、バイカル湖の南、セレンゲ河の流域だった(29)。高車はテュルク系遊牧民の一部であり、5 世紀頃は十二の部族を成し、南方のモンゴル高原にあった遊牧民柔然の勢力と対峙していたことから、そう考察されている。

13 世紀のモンゴル人の一部をなした遊牧ウリヤングト族の活動地は、バイカル湖の南からバイカル湖西南の



エニセイ河源流にかけての地域だったと考えられる。この遊牧ウリヤングトの活動地については、史書に明確な記録がないのだが、ラシードの『集史』やドーソンの『蒙古史』にある森のウリヤングトとよばれた人々の記録をもとにすると、このように考えることができる(30)。現在バイカル湖の西南にはトゥバ共和国があるが、この国は清朝の統治下ではタンヌ・ウリヤンハイとよばれていた(31)。ウリヤンハイは、前章で述べたようにウリヤングトの後裔である。こうした呼称も、かつてこの辺りがウリヤングトの活動地域であったことを示している。

バンザロフが記録した19世紀のウリヤンハイは、おそらくバイカル湖の西に居たウリヤンハイであろう。ウリヤンハイはモンゴル帝国以降分派して各地に移動したが、バイカル湖の西は19世紀になっても彼らの住地の一中心だった。バンザロフは、バイカル湖の周囲に住んでいたブリヤート・モンゴル人の学者である。彼には間近にいたウリヤンハイの知識があり、これを記録したものと考えられる。

トルグートは、ハルヴァが調査記録をまとめた時には、アルタイ山脈から天山山脈の北側に散居していたが、15世紀頃はモンゴル高原の西部にいて、オイラト

部族連合の一つとしてエセン・ハーンに従っていた。そのオイラトの13世紀頃の住地は、バイカル湖の西、アンガラ河やイエニセイ河の上流だった(32)。前章のトルグートが伝えた話にはメルキュットという英雄が登場したが、メルキュットといえは、すぐに想起されるのはモンゴル帝国のメルキト族である。モンゴル帝国時代のメルキトの住地はバイカル湖の南からシベリア東南部だった。こうした各民族の歴史的住地からすれば、19世紀のトルグートが、自分たちは雷を避けることができると信じていたのは、むかしバイカル湖の西や南にいた自分たちの祖先から、もしくは近接した民族の祖先から受け継いだものと考えられる。

このように雷を恐れなかった遊牧民の生活地は、モンゴル高原ではなかった。みな同じようにモンゴル高原の北側、図1のBの地域であった。雷を恐れた遊牧民の生活地と雷を恐れなかった遊牧民の生活地は、このように明らかに違っていた。

## (2) 各活動地域の自然と雷

次は、それぞれの生活地の自然である。これを確かめるために、図1に自然の状態を描き込んだ(33)。図1はモンゴル高原を中央にして、その周囲を示している。こ

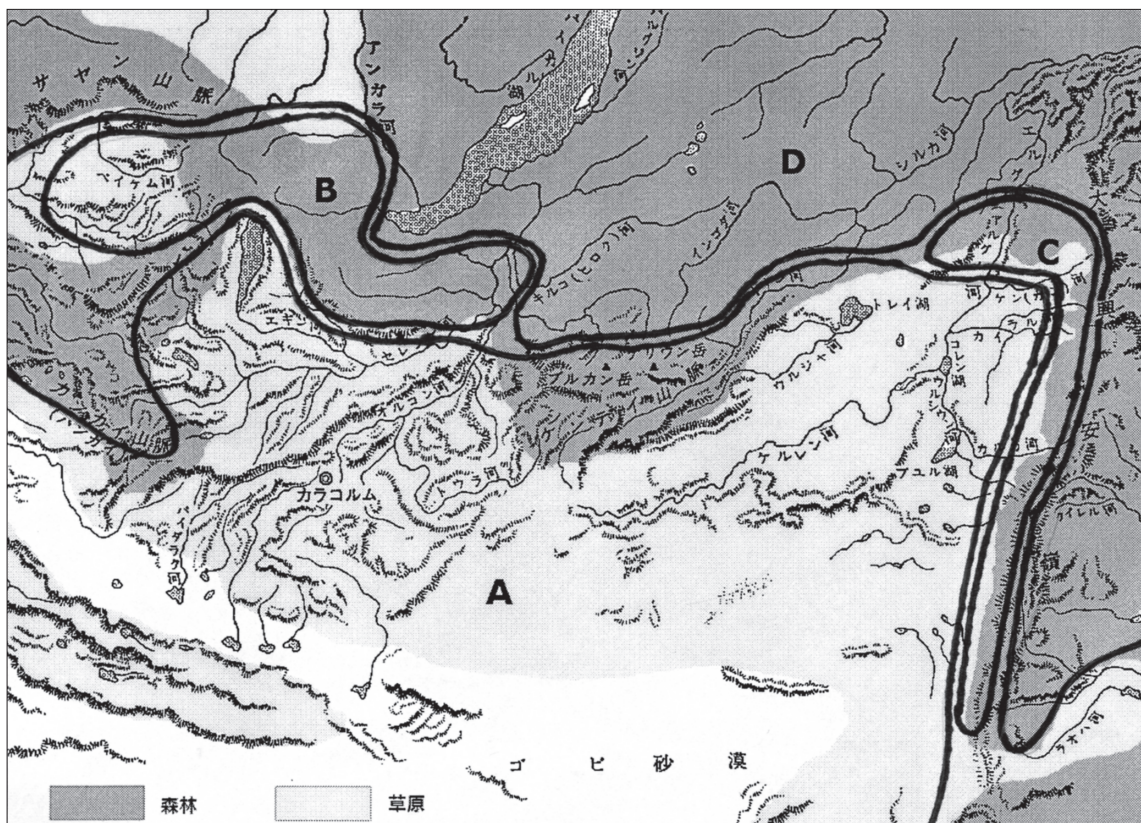


図1

の図の中の自然をおおまかに説明すれば—モンゴル高原の南部はゴビである。モンゴル高原中央部から北部は広大な草原地帯である。そしてモンゴル高原から北に向かって斜面を下ると、徐々に樹木が増えていき、バイカル湖より北は深い森林タイガとなる。

この図によれば、Aの地域とBの地域では自然環境が違うことが明瞭である。モンゴル人が活動したAの地域は、草原地帯である。あらためて言うまでもなくモンゴル人は草原の只中に暮らした遊牧民であった。いっぽう高車、遊牧ウリヤングト、ウリヤンハイ、トルグート、メルキトラが根拠地としたBの地域は、草原から森林地帯に変わるところである。つまり高車らは草原と森が入り交じるところで暮らした遊牧民であった。

そうであれば、Aの地域とBの地域では、落雷の危険度に違いがあったはずである。雷の危険度は、森林よりも草原の方が高い。雷はとりわけ高い物体に落ちる性質をもっている。山の斜面であれ平坦な草原であれ、そこに突き出た人、動物、テントなどは雷の格好の放電ポイントとなる。したがって、まわりに樹木のない草原上で馬に跨った遊牧民は全く危険な状態にある。もし雷に見舞われたとき、これで無事にすんだとすれば、幸運という外ない。草原上で雷を避けようとするれば、できる限り低く身を伏せるしかない。モンゴル人がテントの中で小さくなったというのは、図らずも最善の行動だったといえよう。

草原に比べると森林の中は、雷の危険度が低い。雷はたいいてい高い樹木に落ちる。樹木の直下にいると危険だが、樹木からやや離れた位置にいれば雷の危険は薄れる。したがって草原と森が入り交じるところ、つまり樹木がそこここに立っているような草原は、草原の只中よりも危険度が低い。樹木からやや離れた位置にいれば、空に矢を放つようなことをしても雷に打たれる可能性は低い。

さて以上確認してきたことをもとにすれば、北方遊牧民の雷に対する行動の違いを、主として彼らの生活地の自然条件によるものと推測することに無理はないと考える。

モンゴル人の遊牧地は草原の只中だった。ここは雷の危険度がきわめて高いところで、彼らはしばしば雷撃を受けた。そこで彼らは雷に対して非常な恐怖心を抱くようになったのであろう。

いっぽう高車やウリヤングトらの遊牧地は森と草原が入り交じる地域だった。ここは草原の只中に比べれば雷の危険度がやや低い。この危険度の低さが彼らに雷に反抗する余裕を与えたのであろう。そもそも草地で動物を飼う遊牧民にとって、雷は誰にも恐ろしいものであった。

ところが何かのときに、雷を追い払おうとする強気の言動をする者が現れた。そのときの場所がたまたま安全なところであったため、幸運にも雷に撃たれないことが続いた。そこでその強気の言動をした者は、自分は雷に撃たれないと信じ込んだ。それがやがて一族の特権と理解されるようになり、代々受け継がれることになったのであろう。

しかしこの雷に反抗するというのは、めったにない行動だったであろう。草原と森林が接する地域は、モンゴル高原の北側だけではない。東側の大興安嶺との境目、図1のCも同様な地域である。しかしCの地域には、雷に反抗したという記録がない。大興安嶺を根拠地とした遊牧民族といえ3～6世紀の鮮卑や10～12世紀の契丹があげられるが、鮮卑や契丹は生活習俗の記録をたくさん残してはいるものの、そうした記述はない。ということは、雷に対する反抗的行為は、草原と森林が重なる地域であればどこにでもあったわけではない。図1B地域の遊牧民の雷に反抗する習俗は、偶然や幸運がたまたま重なって生まれた珍しいものだったと考えられる。

### (3) 雷の数よりも雷の危険度

ところで、史書の中には「モンゴル高原では雷鳴がきわめて頻繁に起きる」と書いているものがある。しかし拙稿では雷の多寡については論じなかった。なぜなら、雷の多さと北方民族の雷に対する恐怖心は関係がないと考えるからである。

たしかに雷の光や音はすさまじく、これには誰もが緊張する。落雷を受けて樹木が裂けたり燃え上がったたりする光景は、誰の目にも恐ろしい。しかしこうした現象に頻繁に遭ったとしても、自分自身に何もダメージがなければ、絶対的な脅威にはならない。暫く耐えれば、それで済んでしまうであろう。モンゴル人の雷に対する恐怖心を形成したのは、モンゴル高原の雷の多さではなく、草原の極めて高い危険度であったと考えるべきである。

実は世界全体からみれば、モンゴル高原は雷が多いところではない。図2は世界の稲妻の発生数を人工衛星によって観測した結果である(34)。もちろん今の自然の状況は、モンゴル帝国時代とはやや異なっているかもしれない。しかし雷の発生数は、気候の温暖化から考えれば、今よりも昔の方が少なかったと考えられる。とにかく図2を見れば、モンゴル高原上では、雷は山地で樹木の多いところに多く発生し、草原に少ないことが分かる。草原より森林の方に雷が多いのは、森林上空の大気中には水蒸気が多く、雷雲が発生しやすいためである。しかし雷は樹木の多いところによく発生するといっても、格別



多いわけではない。その数は日本とそう変わらないのである。バイカル湖より北の森林地域を見ると、森林であるにもかかわらず雷の発生数が少ない。これは、緯度が高く寒冷なため、水蒸気が乏しいからである (35)。

このようにモンゴル高原は特に雷が多いところではな

い。また草原地域は、高原の中でも雷が少ないところである。「モンゴル高原では雷鳴がきわめて頻繁に起きる」という話は、きっと雷に殆ど遭ったことのない乾燥地域や寒冷地域の人々の感想をもとに書かれたものであろう。

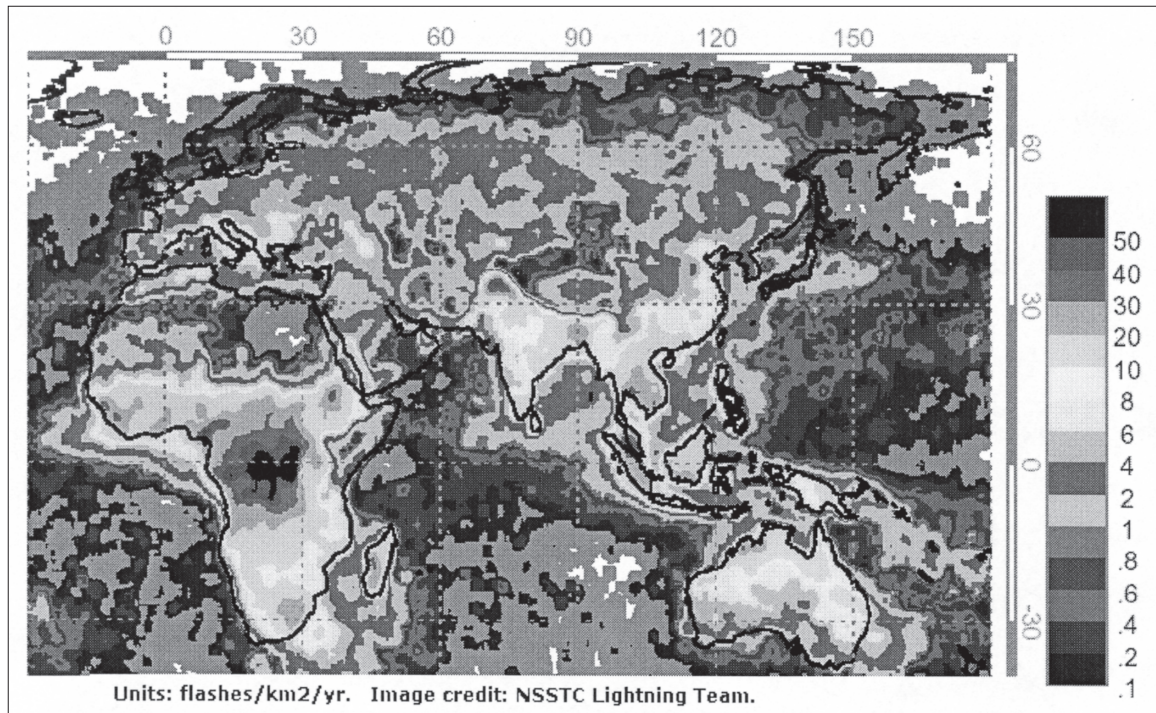


図 2

#### (4) 森林の狩猟民と雷

ここでもう一つ確かめなければならないことがある。それは森林地域の住民が雷に対してどのような行動をとったかである。上述の理屈からすれば、森林の住民は雷を恐れなかったはずであるが、果たしてそうだろうか。北アジアの森林の住民は、生業が主に狩猟であり、遊牧民とは生活形態が違う。しかしここで確かめるのは、雷に対する恐れと自然条件との関連であるから、生活形態の違いは問題ではない。

北アジア東端部 (図 1 よりも東方に位置する D) の森林について調べてみると、ここには夫餘、挹婁、高句麗、靺鞨、渤海、女真などの国があったが、しかし中国の史書は、雷の記事を何も載せていない。たぶんこの地域の生活には、雷について特筆すべきことは何もなかったということである。

北アジア北端部 (図 1 の D) については、ここも僻遠の地であるため歴史記録は殆どないのであるが、18 世紀以降の民族誌には、雷に関することがいくつか書かれている。民族誌を集成したウノ・ハルヴァの書には、次のような記事が見える (36)

・バイカル湖の周りの森林に住むブリヤートは、雷が落

ちると、家畜がそこに入らないように柵をめぐらした。

- ・ブリヤートは、雷に撃たれて人間が死ぬと、その人間は家に連れて帰れないため、雷が落ちた場所に特別のテントを設けて葬儀を行った。
- ・イェニセイ河流域のツングースは、落雷によって森林火災が生じて、決してそれを消そうとしなかった。

これらの記事は、森林の狩猟民たちが、雷の落ちた場所や雷に撃たれた人を恐れたことを伝えている。彼らが落雷を受けた人、もの、場所を恐れたのは、遊牧民と似ている。しかし狩猟民たちは雷そのものを恐れてはいない。記事の中に、落雷を天神の怒りとか雷神の罰ととらえたところがないことが、それを示している。

さらに 18 世紀の記録を見ていくと (37)、

- ・ブリヤートは、落雷で焼けた樹木の木っ端をとり、悪霊を追い払うためにそれを原っぱの遠くに投げつけた。
- ・シベリア東部のヤクートは、焼け跡の木っ端を燃やして家を燻し、悪霊から家を守った。
- ・ヤクートは、落雷の跡を掘り、地中から武器に似た石が見つかったと、これを天から降ってきた雷の斧と信じて、家を稲妻から守るために家中にしまった。この石をまた薬としても用い、この石のかけらを入れた水を

飲んだという。

ということが記されている。これらの記録は、彼らが雷を、悪魔を追い払ってくれる神と信じていたことを伝えている。森の狩猟民は、雷に悪魔を退治してくれることを期待し、雷を恐れなかった。しかも積極的に雷の力を利用していたという。

森の狩猟民が雷を、悪魔を追い払ってくれる神と信じていたことは、20世紀初頭、シベリア沿海地方のツングース系ゴリド人猟師が語った話にも見えている。

「雷はアグディだ。悪魔が一つ所に長いこといると、エンドウリが雷をよこして、アグディがその悪魔を追っ払う。あの雷のおちたところ、あすこに悪魔がいたんだ。悪魔が去ると（これは雷のおちたあと）、平安があたりをしめる。動物、鳥、魚、草そして虫さえも悪魔の去ったことを知って、喜びにみち、愉快になる。…」(38)

エンドウリとは天の最高神の一名である。ここには、雷神と天神の関係が語られている。雷神は天神に命じられて悪神を追い払うのだという。こうした考え方が森林一帯に広まっていたとすれば、本節に記した狩猟民の行動はすべて理解できる。すなわち、森の狩猟民にとっては、落雷は天神が人を罰するものではない。天神が悪魔を追い払うためのものなのである。雷が落ちた所には悪魔がいた。ゆえに彼らは雷が落ちた所を恐れた。雷神は悪魔を追い払う神である。ゆえに彼らは雷が落ちた所の木っ端や石を、悪魔除けとして使った。そうすると、ときたま落雷で使者が出るのは、雷神が悪魔を追い払うときに巻き添えを食らったと理解される。

このように森林地域の住民には、雷を恐れたという事実、また反抗的行動をとったという事実は確認できない。そうすると、以上に述べてきたところを総合すれば、一般的に草原の住民は雷を恐れ、森林の住民は雷を恐れていなかった。そして草原と森林の間にいた住民は、雷に対してその中間の態度を取っていたと見ることができる。

## 結び

歴史書や民俗誌によれば、モンゴル帝国のモンゴル人は、非常に雷を恐れたという。いっぽう高車やウリヤンギト、ウリヤンハイ、トルグートなどは逆に雷に反抗したという。このように民族によって雷に対する態度や行動が違ったのは、主として彼らの生活地の自然条件によるものと考えられる。

北アジアの自然は大まかにいえば砂漠と草原と森に分かれている。砂漠には雷は殆ど発生しない。雷が発生するのは草原と森の地域である。発生数は草原よりも森の

方が多い。しかし人や家畜が雷に撃たれる危険度は、森よりも草原の方がはるかに高い。

この雷に撃たれる危険度から見ると、北アジアはおおよそ3つの地域に分かれる。一つは内陸（図1のA部分）。ここは草原地帯であり、最も危険度の高い地域である。もう一つは大陸の外縁（図1のD部分）。ここは森林地帯であり、危険度の低い地域である。そしてあと一つは内陸部と外縁部の間（図1のB・CおよびBとCを結ぶ部分）。ここは草原と森林が入り交じったところであり、危険度がやや低い地域である。

雷を非常に恐れたモンゴル帝国のモンゴル人は、広大な草原の只中に遊牧していた。ここは雷の危険度が最も高いところである。このためモンゴル人はしばしば雷に撃たれ、ひたすら雷を怖れるようになったのであろう。

いっぽう雷に反抗した高車らが遊牧していたのは、モンゴル草原の北端、森林に接した地域だった。ここは雷の危険度がやや低いところである。このため雷に反抗しても無事に済む者がいて、この結果自分たちは雷に撃たれないと信じるようになったのであろう。

さて拙稿が目的としたところは、これで述べ終えた。北方遊牧民族の雷に対する態度や行動に、自然条件が深く関係していたことが確かめられた。この結果は、彼らの雷信仰や天信仰の分析を進めるのに重要な鍵になる。これについては、また別稿で論じる。

## 註

- (1) 徐霆『黒韃事略』  
霆見韃人、毎聞雷霆、必掩耳、屈身至地、若躡避状、
- (2) 『ルブルクのウィリアム修道士の旅行記』（護雅夫訳『中央アジア蒙古旅行記』所収、1965、桃源社）p.151
- (3) ドーソン『モンゴル帝国史』（佐口透訳注、1968-1976、平凡社）2、第2篇第1章、補注1所引、p.356
- (4) 趙珙『蒙韃備録』祭祀の条  
其俗最敬天地、每事必称天、聞雷声則恐懼、不敢行師、曰天叫也、なお『蒙韃備録』は宋の孟珙撰と伝えられるが、王国維の『箋証』によって趙珙撰と正された。
- (5) 前掲『ルブルクの旅行記』、p.151
- (6) 前掲ドーソン『モンゴル帝国史』2、第1篇第10章所引、p.45  
ちなみに原注には次のような資料が引かれている。  
パラス（『モンゴル民族史料集成』第1巻、p.131）の伝えるところによると、アブル・ガーズィーが引用した、炊事道具を水をもって洗うことを禁ずるというチンギス・カンの法令は今なおカルムク族によって信心深く守られているが、カルムク族は乾革または毛氈でこれを清潔にぬぐうのみであるという。
- (7) 『プラノ・カルピニのジョン修道士の旅行記』（護雅夫訳『中央アジア蒙古旅行記』所収、1965、桃源社）p.22
- (8) 前掲ドーソン『モンゴル帝国史』2、第2篇第1章補注1、p.356。また同書第2篇第2章、p.133には、次のようにある。  
モンゴル人の間においては、春と夏の期間に、日中に流



- 水に水浴し、これに手を浸し、金銀の瓶をもってその水を汲み、洗濯した衣服を地上に乾かすことを禁止していた。何となれば、モンゴル民族はこのことは雷鳴を引きおこすと迷信深く信じていたからであって、かれらの地方では雷鳴はきわめて頻繁であって、モンゴル人はこれに対し極度の恐怖感を抱いていたのである。
- (9) 前掲『カルピニの旅行記』、第4章、p.21、また前掲『ルブルクの旅行記』、第7章、p.151にも同様の記録がある。
- (10) 徐霆『黒韃事略』  
遭雷与火者、尽棄其資畜而逃、必期年而後返、
- (11) 前掲『カルピニの旅行記』、第3章、p.18。『ルブルクの旅行記』にも、モンゴル人が火を崇拜し、火で清める場面がいくつも見える。
- (12) 同上
- (13) 前掲ドーソン『モンゴル帝国史』2、第2篇第2章、p.133
- (14) マルコ・ポーロ『東方見聞録』（愛宕松男訳注、1970、平凡社）1、第3章、p.260
- (15) 『魏書』巻103、高車伝  
喜致震霆、每震則叫呼射天、而棄之移去、至來歲秋、馬肥、復相率候於震所、埋殺羊、燃火拔刀、女巫祀說、似如中国祓除、而羣隊馳馬旋繞、百巾乃止、人持一束柳棧、回豎之、以乳酪灌焉、
- (16) 紀元前5世紀に書かれたヘロドトスの『歴史』には、高車とそっくりの行動をとった民族の記録が載っている。トラキア人である。トラキア人は東欧に居た民族で、雷や稲妻があると天に向かって矢を放ったという。なぜなら「トラキア人は自分たちが信じる神以外の神、すなわち雷を起こすギリシアの神ゼウスを認めなかったからである」（松平千秋訳『歴史』巻4、1972）。このトラキア人の住地は北アジアと関係した遊牧民スキュタイと接する地であって、このトラキアの宗教習俗が北アジアに伝わった可能性が全く無いわけではない。しかしそう考えるのは難しいだろう。トラキアの神ザルモクシスは大地を支配する神であり、いっぽう高車を含め北アジアの遊牧民が主に信仰したのは天神だったからである。
- (17) 註(15)に同じ。
- (18) 拙稿では、落雷の跡で行う儀式を清祓儀式とまとめたが、そこには民族によって様々な思念があった。たとえば後世のブリヤート人は、雷が落ちた建物から雷神の矢を空に送り返す儀式を行った。（後掲ウノ・ハルヴァ『シャーマニズム』第9章雷、p.198-199）
- (19) 拙稿「北アジアより朝鮮に至る古代の祭天について（上）（下）」（『東海女子短期大学紀要』13、22、1987、1996）
- (20) 『魏書』巻103、高車伝  
時有害死及疫癘、則為之祈福、若安全無他、則為報賽、多殺雜畜、燒骨以燎、走馬遠旋、多者数百巾、男女無小大皆集会、平吉之人、則歌舞作樂、死喪之家、則悲吟哭泣、
- (21) 前掲ドーソン『モンゴル帝国史』2、第2篇第1章、補注1所引、p.356
- (22) 同上
- (23) 同上
- (24) 前掲拙稿「北アジアより朝鮮に至る古代の祭天について（上）」
- (25) 箭内互「元良哈三衛名称考」（『蒙古史研究』所収、1930）。前掲ドーソン『モンゴル帝国史』1、佐口氏注記、p.307。後掲『モンゴル秘史』1、巻1、村上氏注記、p.22。
- (26) ドルジ・パンザロフ「黒教或は蒙古人に於けるシャーマン教」、1846、白鳥庫吉訳、1942、（『シャーマニズムの研究』所収、1971、新時代社）、p.20
- (27) ウノ・ハルヴァ『シャーマニズム—アルタイ系諸民族の世界像』（田中克彦訳、1987、三省堂）、第9章雷、p.191-192
- (28) 『モンゴル秘史』（村上正二訳注、1970-1976、平凡社）1～3、岩村忍『元朝秘史』、1966、中央公論。前掲ドーソン『モンゴル帝国史』など。
- (29) 松田寿男『古代天山の歴史地理学的研究』（1956、早大出版）、第2部第9章。内田吟風「柔然族に関する研究」（『北アジア史研究 鮮卑柔然突厥篇』所収、1975、同朋社）。
- (30) このモンゴル帝国時代の遊牧ウリヤンギトの活動地については、筆者はつぎのように推定した。  
ラシードの『集史』には、「ウリヤンギトにはモンゴル種のウリヤンギト族と森のウリヤンギト族の二つがあり、これを混同してはならない。森のウリヤンギトとは、木の枝を編み白樺の樹皮でおおった小屋に住み、動物の皮を衣服とし、野生の牛羊の肉を食し、家畜は全く持たずに、牧羊の民を甚だ軽蔑していた人々だ」（a）とある。そして森のウリヤンギトはキルギスとケムケムジュート、即ちバイカル湖の西方、イエニセイ河上流の森林に住んでいたとある（b）。ドーソンの『モンゴル帝国史』には、「森のウリヤンギトの住地はバイカル湖の東方から流れ込むバルグジン河より北方の地域であり、バルグジン河はタタル種族の住む東北の境界を成していた」（c）とある。とすればモンゴル帝国時代の遊牧ウリヤンギトの活動地域はそこに隣接するバイカル湖の南側ということになる。  
また『モンゴル秘史』に見えるウリヤンギト（ウリヤンカイ）の多くは森のウリヤンギトであるが（d）、いくつかの記事が遊牧ウリヤンギトの住地を示唆している。例えばチンギス・ハーン一族の始祖ボドンチャルの話には、ボドンチャルがウリヤンカイを襲ったことが書いてあり、そのときのウリヤンカイの集団は北方から南のモンゴル高原へ移住してきたもののようである（e）。またチンギス・ハーンの猛将四狗の一人となったジュルメの話を見ると、彼はもと草原の北端に位置するブルカン山にすんでいた（森の）ウリヤンカイであったが、チンギスと出会ったことにより遊牧生活に身を転じたのだという（f）。また同じ四狗の一人スプタイの話を見ると、スプタイがテムジンのもとにやってきたことを、「（森の）ウリヤンカイから離れてきた」と書いている（g）。  
またドーソンの『モンゴル帝国史』には、「チンギス・ハーンの埋葬地の墓守にはウリヤンハイ（ウリヤンギト）が選任された。やがて墓所には樹木が生い茂り、墓がどこにあるのか全くわからなくなった」（h）という話が記されている。この話からも、ウリヤンギトが樹木の茂り易い地域にいた遊牧民だったことが伺われる。  
以上の諸記録から考えれば、遊牧のウリヤンギトと森のウリヤンギトが近接して活動していたことは疑いない。したがってモンゴル帝国時代の遊牧ウリヤンギトの活動地はバイカル湖の南側から、バイカル湖西南のエニセイ河源流地域だったと推定される。  
（a）前掲ドーソン『モンゴル帝国史』1、第1篇第1章補注1、p.305  
（b）前掲ドーソン『モンゴル帝国史』1、第1篇第1章補注2、p.310  
（c）前掲ドーソン『モンゴル帝国史』1、第1篇第1章、p.9  
（d）前掲『モンゴル秘史』1～3。岩村忍『元朝秘史』。  
（e）前掲『モンゴル秘史』1、巻1、p.35-39。このときのウリヤンカイは、ブルカン山の上から眺めることのできるトンゲリク小河に沿って移動していた。また『秘史』が載せる古い説話には、ドア・ソコルとドブン・メルゲンの兄弟が、トンゲリク小河に沿って移動するバルグジン河よ

り来た人々と出会う情景がある。村上氏は、このトンゲリク小河を、北方の種族が草原地帯に南下移住する際の重要なルートであったと考察している。村上正二「モンゴル部族の族祖伝承—とくに部族制社会の構造に関連して—」(『史学雑誌』73-7・8、1964)。

(f) 前掲『モンゴル秘史』1、巻2、p.156にこう云う。「ブルギ川岸にいた時、ブルカン岳からウリヤンカ族の人、ジャルチウダイ翁が、韃を背負うて、ジュルメという子を引き連れて来た。」

(g) 前掲『モンゴル秘史』1、巻3、p.221。村上氏は注記にて、ボドンチャルがウリヤンハイ族の一集団を襲った話などを併せ考えて、ウリヤンハイは最も早くからモンゴル族に征服された、大きくかつ有力な隷属民の集団であったという。

(h) 前掲ドーソン『モンゴル帝国史』2、第1篇第9章補注1、p.25

(31) メンヒエン=ヘルフェン『トゥバ紀行』(田中克彦訳、1996、岩波書店)

(32) 前掲『モンゴル秘史』1、巻4、村上氏注記 p.321

(33) 図1は、前掲『モンゴル秘史』1所載の図を使用して作成

した。自然環境は、松田寿男・森鹿三編『アジア歴史地図』(1966、平凡社)所載「自然および遺跡分布」および帝国書院編集部編『地歴高等地図』をもとにし、簡略に示した。

(34) 図2は、NASA Science News: Where Lightning Strikesの一部を引用。ここには年間1km<sup>2</sup>あたりのフラッシュ数が示されている。

[http://science.nasa.gov/science-news/science-at-nasa/2001/ast05dec\\_1/](http://science.nasa.gov/science-news/science-at-nasa/2001/ast05dec_1/)

(35) 福田英一郎他編『日本・世界の気候図』(1985、東京堂)

(36) 前掲ハルヴァ『シャーマニズム』、第9章雷、p.198

(37) 前掲ハルヴァ『シャーマニズム』、第9章雷、p.194-195。ウェー・エム・ミハイロフスキー「シベリア、蒙古及び欧露の異民族間に於けるシャーマン教」、1892、高橋勝之訳、1940、(『シャーマニズムの研究』所収、1971、新時代社)、p.139。赤松知城・秋葉隆『満蒙の民族と宗教』(1941、大阪屋号書店)、第1章、p.20。

(38) ウラディーミル・アルセーニェフ『デルスウ・ウザーラ』(長谷川四郎訳、1965、平凡社)、第16章、p.192